

英国のペトラルキストたち： エリザベス朝の恋愛ソネット連作の一側面

岩 永 弘 人^{*†}

(令和4年12月1日受付/令和4年12月2日受理)

要約：大学院満期退学後本学に着任して以来、英国ルネサンス期の恋愛ソネットについて研究を重ねてきた。研究を始めたきっかけは、修士課程で取り上げたウィリアム・シェイクスピア『ソネット集』であったが、その後博士課程に進んでシェイクスピアのこの詩集を理解するためには、シェイクスピア以外のマイナーなソネット詩人たちを理解する事が必須であると考えられるようになった。そのような時1996年9月から約1年間の英国ヨーク大学への「依命国外出張」の機会を東京農業大学からいただき、自分の研究プロジェクトの方向性を決める大きなきっかけとなった。それは、英国ルネサンス期（シェイクスピアの時代）のマイナーなソネット詩人（sonneteer）たちの作品（特に、1つのテーマを持った「連作ソネット集」（sonnet sequences）を研究する事であった。結果として、単著『ペトラルキズムのありか—エリザベス朝恋愛ソネット論』（音羽書房鶴見書店、2010）を上梓する事ができた。本論考ではこの単著出版以降の研究論文から、各ソネット詩人の代表作（原文と和訳）をピックアップしてこれまでの自分の研究の軌跡を辿り、今後の研究の方向性を見定める機会にしたい。その際、著書のタイトルにもある「ペトラルキズム」（ルネサンス期にイギリスで流行した、イタリアの詩人ペトラルカの詩風とその影響）を軸に、そのペトラルキズムがイギリスの各詩人によってどのように取り入れられていったかを考えていった。

キーワード：ソネット連作、ペトラルキズム、恋愛ソネット、マイナーソネット詩人

【前書き】連作ソネット詩集 (sonnet sequences) とペトラルキズム (petrarchism) について

「連作ソネット詩集」という概念は非常にわかりにくいので、各論に先んじて少し説明しておく。1590年代、フィリップ・シドニーやエドモンド・スペンサーを中心として進んでいった恋愛ソネットの流行は、ソネット1篇で勝負するというよりは、ソネットをいくつか並べて1つのストーリーらしきものを持った連作を書くというものであった。（途中でソング、エレジーなどが挟まれる場合もあった。）この全体が「連作ソネット詩集」と呼ばれたのである。また、この「連作ソネット詩集」には、自分が愛する女性の名前（リシア、フィデッサ、ダイアナ、など）がつけられたり、自分と相手の女性の関係をタイトルにしたもの（『アストロフェルとステラ』、『パーセノフィルとパーセノフィー』など）も多かった。もちろん、詩集のタイトルとは関係ない人物やエピソードが登場する事も多く、今の文学作品のような一貫性はない。このようなやり方は、先ほど述べたイタリア13世紀の詩人ペトラルカの影響を強く受けて出来上がったものだった。

諸説あるが、現在の研究によると「ソネット形式」（14行を基本とする詩形）のルーツは、12世紀のシチリアに

あるとされる。それが北上し、トスカナ地方にたどりつき、ダンテやカヴァルカンティを中心とする「清新派」（dolce stil nuovo）に伝わり、ソネットはその最盛期を迎えていく。このような時代にソネット文学に与したのがフランチェスコ・ペトラルカ（1304-1374）であり、この詩人の詩風が、直接／間接にイギリスに伝わり「ペトラルキズム」（ペトラルカ風）と呼ばれるようになった。

本稿においては、このペトラルキズムの影響を強く受けた1590年代のマイナーソネット詩人の作品として、以下の6つの連作ソネット集を取り上げる。【1】トマス・ロッジ（Thomas LODGE, 1558-1625）『フィリス』（*Phyllis: Honoured with Pastorall Sonnets, Elegies, and amorous delights*, 1593）、【2】ジャイルズ・フレッチャー（Giles FLETCHER, 1546-1611）『リシア』（*Licia*, 1593）、【3】匿名詩集『ゼフィーリア』（*Zepheria*, 1594）、【4】ウィリアム・パーシー（William PERCY, 1575-1648）『シーリア』（*Sonnets to the Fairest Coelia*, 1594）、【5】サー・ジョン・デイヴィース（Sir John DAVIES, 1569-1626）『ガリング・ソネット』（*Gulling Sonnets*, ca.1595）、【6】リチャード・バーンフィールド（Richard BARNFIELD, 1574-1627）『シンシア』（*Cynthia*, 1595）。なお、扱う順番は問題となる連作ソネット詩集（sonnet sequences）の出版年代順とした。

* 東京農業大学名誉教授

† Corresponding author (E-mail: iwan@nodai.ac.jp)

【1】トマス・ロッジ『フィリス』(1593) ・・・「想い」について

『フィリス』(1593)はトマス・ロッジが25才の頃書いた連作ソネット詩集で、40篇のソネットと2つの中篇詩からなる。彼は翻訳による当時のフランス文学の紹介者でもあったが、この『フィリス』においても彼は、ロンサールやサンナツァロなどの凝った文体を模倣し、比較的忠実に翻訳している。(作品のほぼ半数が翻訳、翻案であるとされる。)従って、この詩集に対する先行研究においては、この詩集の中の作品のソース探しに時間が費やされてきた。本論では少し視点を変えて、ペトラルキストとしての詩人ロッジの特質を考える事とし、その際特にペトラルカとロッジが共に用いている「想い」(英語 thought, イタリア語 pensiero)に焦点を当てて、比較を試みたい。

順序としてはまず、フィリスへの「悲しみという想い」という意味で thought が使われているソネット、その後「欲望という意志」、そして最後のロッジ独自の意味で使われているソネット、を見てみよう。

1) 「想い」としての thought

Sonnet I.

Oh pleasing thoughts, apprentices of loue,
Fore-runners of desire, sweet Methridates
The poison of my sorrowes to remoue,
With whom my hopes and feare full oft debates.
Inritch your selues and me by your selfe riches,
(Which are the thoughts you spend on heauen bred beauty.)
Rowse you my muse beyond our Poets pitches,
And working wonders yet say all is duty.
Vse you no Eglets eyes, nor Phenix feathers,
To tower the heauen from whence heauens wonder sallies:
For why your sonne singes sweetly to hir wethers:
Making a springe of winter in the vallies.
Show to the world tho poore and scant my skill is,
How sweet thoughts bee, that are but thought on Phillis.

1

ああ、楽しい想いよ。愛の徒弟。

欲望の先駆け。甘い万能薬。

僕の悲しみの毒を取り除くための。

お前を相手に、僕の希望と恐れはいつも争っているのだ。

お前自身の富で、お前自身と僕を豊かにしてくれる。

(それはお前が、天来の美に費やす「想い」であるのだから。)

そして、僕の詩神を、我々の詩人の高さを超えて登らせ、

奇跡を起こしながらも、全ては仕事ですから、と言え。

お前は、天の奇跡がそこから投げられる場所(天国)へと高く登るために、

子鷺の目とかフェニックスの羽根など使わなくていい。

何故なら、お前の太陽(フィリス)は、自分の天候に合わせて甘美に歌うのだから。

谷で、冬から春を作りあげながら。

世界に教えてやれ。僕の技巧は貧しくて、全然足りないが、「想い」はいかに甘美な事か。それがフィリスに対するものである限り。

最初に述べられているのは、「愛の想い」への呼びかけである。それは「愛の徒弟」であり、「欲望の先駆け」であり、同時に悲しみを取り除く万能薬でもある。その「想い」と共に、詩人は「希望と恐れ」と戦う。第2連では、その「想い」は天来の美に対して向けられているのだから、詩人自身の力量以上のものへと導くことが歌われる。だから、と第4連ではうたう。「だから、誇張して、鷺とかフェニックスとかのイメージを使わなくてもいい。」「お前の太陽は、彼女の天候次第で、谷に春をもたらす事ができる。」と。最後のカプレットは、当時のソネットによくある謙遜の形を取る。「自分の技巧は全然足りないが、素晴らしいきみの事を歌えばそれは全て美しくなる」と。このソネットでは thought という語が3度使われていて、そこから判断すると、(1)「想い」は「希望と恐れ」との戦いの原因である事。(すなわち彼女のイメージ、姿を表す)。(2)「想い」は、美に対して「費やされる」ものであるということ、である。だからこそそれは、今後、欲望へと変わって行く可能性を持つ。(OEDの3番目の意味、“conception, imagination, fancy”に近い意味である。)

2) 「欲望」としての thought

Sonnet XXI.

Ye heraultes of my heart, mine ardent groanes,
O teares which gladly would burst out to brookes,
Oh spent on fruitlesse sande my surging moanes,
Oh thoughtes enthrald vnto care-boading lookes.
Ah iust laments of my vniust distresse,
Ah fond desires whom reason could not guide,
Oh hopes of loue that intimate redresse,
Yet proue the load-stars vnto bad betide.
When will you cease? or shall paine neuer ceasing,
Seaze on my heart? oh molifie your rage,
Least your assaultes with ouer swift increasing,
Procure my death, or call on timelesse age.
What if they do? they shall but feede the fire,
Which I haue kindled by my fond desire.

21

お前たち、心の使者、僕の激しいうめき声よ、

ああ、喜びで小川となって流れ出す涙よ、

ああ、不毛で、収穫のない砂地。僕の流れでる嘆きよ。

ああ、苦しみを予言する眼差しに捕われた、想いよ。

ああ、僕の不当な苦しみに対する正当な嘆きよ。

ああ、理性が導く事ができない、愚かな欲望よ。

ああ、報いをほのめかしながら、

実は不幸への道しるべである、愛の希望よ。

お前たちはいつ終わる。それとも、決して終わる事のない苦痛が

僕の心を捕えつづけるのか。ああ、お前たちの激しさを静めよ。
お前の攻撃が、加速度を増しながら、
僕の死を齎したり、時期尚早に老いを迎えさせたりしないように。
もしそうなくてもどうだ？それは火に燃料をくべるだけだろう。
その火を、僕は愚かな欲望でもって燃え立たせてきたのだから。

4行目の thought は「苦しみを予言する眼差しに捕われた、想いよ。」と呼びかけられており、enthrall という言葉と組み合わせられて、より現実感を持ったものとなっている。ロッジのこのソネットでは、恋する者の特徴と言われるペトラルカ的な様々な兆候（ため息、涙、など）が最初の8行で述べられ、それがいつ終わるのだろうかという嘆きが述べられている。そして、後半6行では、その収束を願った後、最後の2行では開き直るという形をとっている。

3) イギリス的 thought

最後にロッジ的なペトラルキズムの深化の1つの証しとして、『フィリス』14番をあげる。ここには、ペトラルカを出発点としながらも、ロッジのイギリス的なオリジナリティを感じる。そこにパストラル的なものが感じられるのが大きな特徴である。言わばイタリア風ソネットとイギリス風ソネットの融合である。

Sonnet XVIII.

I wroat in Mirrhaes barcke, and as I wroate,
Poore Mirrha wept because I wroat forsaken:
T'was of thy pride I soong in weeping noate,
When as hir leaues great moane for pittie maken.
The falling fountaines from the mountaines falling,
Cride out ah-las, so faire and bee so cruel?
And Babling Echo neuer ceased callenge,
Phillis disdaine is fitte for none but truthlesse.
The rising pines wherein I had engraued,
Thy memorie consulting with the winde:
Are trucemen to thy heart, and thoughts depraued,
And say thy kind should not bee so vnkinde.
But (out ah-las) so fell is Phillis pheerlesse,
That she hath made hir Damon welnie tearlesse.

14

僕はミルラの木の樹皮に文字を書いた。そして、
僕が「見捨てられた」と書いたので、かわいそうなミルラは泣いた。
涙を誘う調子で僕が歌ったのは、きみのプライドについてだった。
その葉が、哀れみのために大きな嘆き声をあげた時、
山から流れ落ちる泉が「ああ」と叫んだ。
「あんなに美しいのに、あんなに冷酷。」
そして泡をたてるエコーも、叫ぶ事を止めなかった。

「フィリスの軽蔑は、真実がない者にだけふさわしい。」
高く聳える松の木。そこに僕は
風と相談しながら、きみの記憶を刻みつけていたが、
その木は、きみの心と踏みにじられた想いの仲裁人だ。
その木は言うのだ。「お前たち女は、そんなに非人情ではいけない。」
だが、ああ、フィリスは比類なく残忍なので、
デイモンの涙を、ほとんど涸らしてしまったのだ。

thought (11行目) は、「踏みにじられた」という強い語と結びついて、現実感をもった意味と取れる。1行目と2行目では、木に彫り込まれた、愛する人の名前を見て、木が涙を流す。その後それらに共鳴するように、葉や泉や木霊や風等がそれに答え、冷酷なフィリスを責める。そして松の木は、<きみの心=冷酷な彼女>と<踏みにじられた想い>の仲裁人としての役割を果たし、フィリスに少しは心を開くように勧める。しかしそれでもフィリスは極端に冷酷なので、詩人ダイモンの涙はすっかり涸れてしまったと最後に嘆く。このソネットの優れている点はペトラルカに含まれるパストラル的要素をうまくイギリスに移し、フィリスをラウラの女性ではなく、羊飼いの娘に設定している所にあると言えるだろう。

[2] ジャイルズ・フレッチャー『リシア』 (1593)・・・ネオラテン文学と ソネット文学の融合

ここでは、イギリス16世紀のソネット詩人ジャイルズ・フレッチャーの連作ソネット詩集『リシア』(Licia, 1593)を、そのソースの1つであるとされる、ネオラテンの詩人セクンドゥス(Jan Secundus EVERAETS, 1511-1536)の『バジア』(Basia, c.1541, タイトルは「接吻」という意味)との比較の上で読んでみた。「ネオラテン」とは、「ペトラルカ以降、(国際語としての)ラテン語で詩を書いた詩人たちの事であり、<ルネサンスラテン>とか<初期近代ラテン>と同義である」(The Oxford Handbook of Neo-Latin, 2015)。これらの詩人は、ギリシア・ローマの詩人たちの影響を強くうけていた。

ジャイルズ・フレッチャーは、有名な劇作家ジョン・フレッチャーの叔父に当たる。彼は1546年にワトフォードに生まれたとされ、イートン時代から詩の才能を示したようである。大学はケンブリッジで、1572年にレクチャーシップを得、大学でもラテン語の詩を多く書く。いろいろな政府の役職にも就いた事が知られている。1593年に、本論で扱う連作ソネット集『リシア』が、匿名で上梓されることになる。その執筆の際、彼はPoetae Tres Elegantissimiというネオラテン詩のアンソロジーを主に参照したとされるが、ここで彼はセクンドゥスの作品(特に『バジア』)に直接接触したものと思われる。本論では、このセクンドゥスの特徴をよくあらわしている作品『バジア』の13番(以下、S13)の枠組みを使って、フレッチャーのソネットを読んで行く。この詩には大きく分けて3つのテーマがあっ

て、それらは (1) 魂の交換, キスによる魂のやりとり。(2) 愛の成就による死。あるいは、寸止めの死。(3) 冥界, 地獄の描写(特にカローンの船)。ここでは、この順番でフレッチャーの『リシア』の中のソネットを見ていく。

1) キスによる魂の交換

S13 番の 1 つ目のイメージ, 「魂の交換」を生かしているのは『リシア』19 番である。

Sonnet 19

That tyme (faire Licia) when I stole a kisse,
From of those lippes, where Cupid lovelie laide,
I quakt for colde, and found the cause was this,
My life which lov'd, for love behind me staid:
I sent my heart, my life for to recall:
But that was held, not able to returne,
And both detain'd as captives were in thrall,
And judg'd by her, that both by sighes should burne:
(Faire) burne them both, for that they were so bolde,
But let the altar be within thy heart:
And I shall live, because my lyfe you holde,
You that give lyfe, to everie living part,
A flame I tooke, when as I stole the kisse:
Take you my lyfe, yet can I live with this.

19

麗しのルシアよ。僕が、キューピッドが可愛らしく横たわるその唇から、キスを盗んだ時、僕は寒さで震えた。原因はこうだとわかった。恋をした僕の命が、愛ゆえに僕を残して去ってしまった。僕は自分の心を使いに出した。僕の命を取り返すために。しかし心までも引き止められ、帰る事ができなくなった。結果、両方が囚人として拘束を受け、彼女の判決を受けた。両者ともため息で燃やされるべし、と。麗しき方。両方とも燃やして下さい。彼らは不躰すぎたのだから。だが、せめてその祭壇はきみの心の中に置いてくれ。そうすれば僕は生きられる。僕の命はきみが持っているから。あらゆる生きものに命を与えるきみが。僕は炎をもらった。僕がキスを盗んだ時に。きみは僕の命を取るがいい。だが僕はこれで生きる。

このソネットでは、語り手である詩人が、愛する人とキスをした時悪寒を感じたところから始まる。悪寒の理由は、自分の命の源である魂が彼女の肉体に行ってしまったからだ。そしてその魂を取り戻すために、彼は(たぶんもう1度キスをして)今度は心を相手の肉体に送り込むが、心も引きとめられて帰ってこない、という内容である。特に魂の属性や、命を吹き込む、といったあたりがS13に準拠しているように思われる。

2) 愛の成就による死

Sonnet 29

Why dy'd I not when as I last did sleepe?
(O sleepe too short that shadowed fourth my deare)
Heavens heare my prayers, nor thus me waking keepe:
For this were heaven, if thus I sleeping weare.
For in that darke there shone a Princely light:
Two milke-white hilles, both full of Nectar sweete:
Her Ebon thighes, the wonder of my sight,
Where all my senses with their objectes meete:
I passe those sportes, in secret that are best,
Wherein my thoughtes did seeme alive to be;
We both did strive, and wearie both did rest:
I kist her still, and still she kissed me.
Heavens let me sleepe, and shewes my senses feede:
Or let me wake, and happie be indeede.

29

ああ、僕が最後に眠った時なぜ僕は死ななかつたのだろうか。(ああ僕の愛しい人を心に描くにはあまりにも短い眠り!) 天よ、願いを聞き入れてくれ。こんな風に僕を目覚めたままにしておかないでくれ。なぜなら、ここは天国だ、あのよう眠ってられるなら。というのも、その闇の中に気高い光が輝いていたから。2つの乳白色の丘、共に甘いネクターで満たされていた。彼女の象牙のような太腿は、視覚にとっての驚異。そこでは、僕の五感が対象物と出会うのだ。僕は、秘密が一番いい場所については、言わないでおくよ。そこでこそ、僕の想いが一番働いているのだが。僕たちは共に一所懸命になり、共に疲れて休む。僕はずっと彼女にキスをし続け、そして彼女もし続ける。天よ僕を眠らせておいてくれ。そして僕の感覚に餌をくれ。でなければ僕を目覚めさせてくれ、そして本当に幸せにしてくれ。

このソネットは、特に最後の部分がS13番と類似していて、性交渉のあとのけだるさ、キスをし続けること、そして、少し退廃的な雰囲気も受け継いでいる。このソネットは、フレッチャーにしては珍しく性的な表現が多く、セクンドゥスの強い影響を感じる。

3) 冥界の描写

Sonnet 41

If (aged Charon), when my life shall end,
I passe thy ferrye, and my wafftage pay,
Thy oares shall fayle thy boate, and maste shall rend,
And through the deepe, shall be a drye foote-way.
For why my heart with sighs doth breath such flame,
That ayre and water both incensed be.
The boundlesse Ocean from whose mouth they came,
For from my heate not heaven it selfe is free.
Then since to me thy losse can be no gain:
Avoyd thy harme and flye what I foretell.

Make thou my love with me for to be slaine,
That I with her, and both with thee may dwel.
Thy fact thus (Charon) both of us shall blesse
Thou save thy boat, and I my love possesse.

41

年老いたカローンよ、僕の命が終わる時、
お前に川を渡してもらい、船賃を払おうとすると、
お前のオールは船を進める事はなく、マストは折れ、
そして、深い海に乾いた歩道ができ上がるだろう。
というのも、僕の心は、ため息で激しい炎を巻き上げ、
空気も水も共に干上がってしまうから。
それらは無限の大洋の、河口からやってきた。
なぜなら、僕の熱からは天でさえ逃れる事はできないから。
だから、お前の損失が僕の得になるわけではない。
お前の被害を避け、僕が予言した事を回避するがいい。
僕の愛する人を、僕と同時に殺すのだ。
僕が彼女と一緒にいられ、2人してお前と一緒に暮らせる
ように。
このようにして、カローンよ、お前の行為は僕ら両方にとっ
て都合がよい事になる。
お前は自分の船を救い、僕は愛する人を手にする事ができ
るのだから。

この詩の骨子は、自分を殺すなら、彼女も一緒に殺してく
れというものだ。もしそうしないと、僕が欲求不満になっ
て、ため息でもってスティックス川を干上がらせてしまう
から、渡し守のカローンが困ってしまうよ、というもので
ある。この詩の直接のルーツはグルテルス (GRUTER, 1560-
1627) にあるとされるが、セクンドゥス経由のものとも見
られる。

ソネットという13世紀に発明された詩形は16世紀イギ
リスに伝わった。しかし、ここではソネット発明以前 (ギ
リシア、ローマ) の文学作品が、ソネットの内容に影響を
与えるという結果となった。フレッチャーの想像力/創造
力は、いろいろな時代のいろいろな詩人から借り物をしつ
つ、彼なりのソネット空間を作りあげたと言える。フレッ
チャーは、彼自身が『リシア』の序文に書いたように、恋
愛と言うテーマが、れっきとした詩の対象/テーマである
ことを示そうとしたのであった。

【3】匿名詩集『ゼフィーリア』

・・・「怖れ」の感情

ソネット流行の最盛期とも言える1594年に匿名で出版
された連作ソネット詩集『ゼフィーリア』(Zepheria)は、
40篇のソネットから成り立っている。1篇1篇のソネット
のシンタクスは複雑で、省略語や造語も多い。しかし、
その難解さにも関わらずこの詩集には読者を惹きつけるも
のがあるのも事実である。本論では、ペトラルキズムの中
で「怖れ」に関するイメージを『ゼフィーリア』の中に見
出し、この詩人のペトラルカ性を探ってみたい。いうまで

もなく、この「怖れ」の背後には、「純潔」や「プラトニ
ズム」などの概念が存在し、さらにその先には「希望」や
「欲望」が見え隠れする。

詩集『ゼフィーリア』に登場する「怖れ」の一番の特徴
は、それが詩人のものであると同時に、相手の女性 (ゼ
フィーリア)のものとして表現されているという点である。
そこでまず、女性側の<怖れ>をうたったソネットを見て
みる。

1) 女性側の<怖れ>

Canzon 39.

And now thou wing'd Ambassador of wonder,
Liberall dispenser of reproachfull act,
Who neuer whisperst, but in voyce of thunder,
Explor'st what secresie would fayne haue darkt,
Tell my Zepheria, sith thou nil be silenced,
My hopes on her calme smiles did them embarke,
Whose sunny shine seem'd to haue licenced
From them all feare of tempest or of wracke.
Now on the shelve of her browes proud disdayne,
A harbor where they looked for azile.
The Pilot who fore now did expert rayne.
His barke, in seas are all ydrencht, alack the while.
Tell if at leaft fhe all through feare exordiat.
Command thee not to peace ere thou exordiat.

39

さて今や、お前、翼の生えた使者【風評】よ、
非難されるべき行為を、遠慮なく分配する者よ、
お前は、囁やく事などせず、いつも雷のような声で
<秘密>が、できれば隠しておきたかった事実をあら探し
する。

僕のゼフィーリアに言ってくれ。(沈黙している気はない
だろうから。)

僕の希望は、彼女の静かな微笑の上に自分を任せた。
その太陽のような輝きが、彼ら【希望】を
大嵐や難破の「怖れ」から解放してくれたように見えた(か
ら)。

(しかし)今や、彼女の額の、高慢な軽蔑の浅瀬に、
(それは彼らが避難所を求めた港だったが)

以前は、船の制御のプロだった船乗りが、
自分の船を海に沈めてしまった。ああ、なんて事だ。伝え
てくれ。

少なくとも彼女が全くの「怖れ」から気力を失ったのなら、
きみが話し始める前に、沈黙を命じる事がないように。

ここで、詩人は自分の代弁者として「風評、名声」に語り
かけている形を取る。内容は詩人が相手の女性が自分に好
意を持ってきているのではないかという、女性側の兆候
(微笑み)を抜け目なく察知し、一大決心の末自分の気持
ちを吐露するのだが、彼女のプライドと世間体によって、
彼への好意の表明は結局控えられたという内容である(も
ちろん詩人側の一人芝居にすぎないが)。

2) 詩人の確信

女性側の「怖れ」の前景化は、彼女が詩人に対して好意を持っている事を詩人が確信した瞬間に生じる。それを表現したソネットが15番である。

Canzon. 15.

Neare were the siluerie wings of my desire
 Taynted with thought of black impuritie :
 The modest blush that did my cheekes attire
 Was to thy virgin feares statute securitie.
 When to a fauours sweete promotion
 My ioylesse thoughts thou haft aduanced hier,
 Oh then sighs sacrifice of my loues deuotion,
 I sent repurified in holy fier.
 My feares how oft haue I engeminated?
 Oh black recite of passed miserie !
 Thy heart for to entender they haue intimated
 (Besides what thou hast seene) what I haue suffred for
 thee:
 But see, since eyes were aliens to thy beautie,
 I sing mine owne faith, and neglect loues dutie.

15

僕の、欲望の銀の翼は決して、
 黒く汚れた不純の想いに、汚されたことはなかった。
 僕の頬を染める、慎み深い紅潮が
 きみの乙女として「怖れ」への、公けの保証であった。
 きみが、鼯鼠という優しい助けへと、
 僕の沈んだ想いを、より高く持ち上げてくれた時、
 ああその時、僕の愛の献身の捧げものであるため息を、
 聖なる炎でさらに浄化して、送り届けたのだった。
 「怖れ」を、これまで何度くり返してきた事だろう。
 ああ、過ぎ去った過去の惨めさの暗い物語よ。
 それは、きみの心を軟化させるために（きみが目撃した事
 以外にも）
 僕が、きみゆえに苦しんだ事を語り続けてきた。
 だが見るがいい。眼がきみの美に対して無頓着だったので、
 僕は自分の真実を歌いながら、愛の義務を怠っている事になるのだ。

詩人はまず1行目と2行目で、自分の欲望が純粋なものである事を強調する。3行目で、自分の赤面が相手の女性の「乙女としての怖れ」の「公の保証」であるとする。そしてここでは、彼女は明らかな「鼯鼠という優しい助け」を示してくれて、詩人は「より高く持ち上げられた」。(5, 6行目)つまり女性は詩人に対して微笑んだのであろう。しかしそれに対して詩人は「ため息を浄化して、送り届けた。」つまり彼は、彼女の外見ではなく、内的な美徳を褒めちぎったのではないか。（「眼がきみの美に対して無頓着であった」）その結果、詩人は「愛の義務」（これは世間的に考えて、愛の肉体的側面であり、外面的な美の賞賛である。）にこだわり、ここで2人のすれ違いが生じている。詩人はあくまで純潔にこだわり、詩人も顔を赤らめ（3行目）、

また「怖れ」（9行目）を持つのである。つまり世間的な卑俗な愛とは違って、自分の愛は純粋に精神的なものである事を、詩人は強く主張している。

『ゼフィーリア』のペトラルカ性は、プラトニズムを基本とする異常なまでの純粋性へのこだわりとその大きな特徴があった。ただ、女性が詩人に少し心を許すような態度を示したために、詩人は少しだけ「怖れ」の範を超え、口説きへと暴走する。それを見るや、彼女の方は自分の名誉が汚れる事を「怖れ」、再び自分の殻に閉じこもる。すなわち、ソネット文学の枠の中では、彼女が「怖れ」を感じ、態度を豹変させてくれた方が詩が書きやすくなるという事になる。その事によって、彼女と詩人は愛神を相手に共闘して戦う事ができるからである。

[4] ウィリアム・パーシー『シーリア』

・・・列挙法と凡庸さ

ウィリアム・パーシー（William Percy, 1575-1648）は、第8代ノーサンバランド伯の三男で、シェイクスピアの歴史劇で有名なホッツスパーの子孫でもある。その彼のソネット詩集である『シーリア』（*Sonnets to the Fairest Coelia*, 1594）は1594年、パーシー自身の前書きの言葉を借りれば「半ば彼の意思に反して」出版された。20篇の十四行ソネットと1篇のマドリガルからなる、恋愛ソネット詩集である。ソネットを捧げる相手としてはシーリアという女性名が挙げられ、主につれない女性シーリアに対する嘆きが詩集の中心になっている。

さて、この詩集『シーリア』は彼の代表作と考えられているが、この詩集に対する批評家たちの評価は低い。しかしこれは一般的な「よい詩人」を基準にしたもので、「よいソネット詩人」を基準にしたものではない。本論ではパーシーのソネットのペトラルカ性を検証した上で、彼が「よいソネット詩人」である事を証明したい。その際の具体的な手法として、今回はペトラルキズムの代表的修辭法の1つである「列挙法」（多くの事柄が一度に数え上げられるときに見られる修辭法）を使っているソネットを見ていきたい。

1) パーシーの列挙法：外的な特質

まずはパーシーのソネットの中で、相手の女性の外的な特質をプラズン的に述べているソネットを比べてみよう。12番である。

Sonnet XII.

Coelia, of all sweet courtesies resolve me.
 For wished grace, how must I now be doing,
 Since Ops, the completest frame, which did absolve thee,
 Has made each parcel for my sole undoing?
 Those wires, which should thy corps to mine unite,
 Are rays to daze us from so near approach.
 Thine eye, which should my nighted sailors light,

Is shot to keep them off with foul reproach.
 Those ruddy plums embrewed with heavenly foods,
 When I would suck them turn to driest currall,
 And when I couch between her lily buds,
 They surge like frothy water mounts above all.
 Surely, they were all made unto good uses,
 But she them all untowardly abuses.

12

シーリアよ、すべての優しさから僕を解放してくれ。
 望まれた美德のために、僕は今、どうすべきなのだろう。
 きみを完成させた完璧な土台であるオプスは、
 僕を破滅させるためにのみ、それぞれの部分を作ったのか。
 その針金（頭髪）、それはきみの体を僕の体に結びつける
 物だが、
 僕たちを、幻惑して近づけなくさせる光線だ。
 きみの眼、それは僕の闇に落とされた水夫たちを照らすも
 のだが、
 残酷な非難で、彼らを遠ざけておくために砲撃する。
 あの赤いプラム、それは天上の食べ物で浸されているが、
 僕が吸い込もうとすると乾燥しきった珊瑚になってしま
 う。
 そして僕が、彼女の百合の蕾の間でうずくまる時、
 それは泡立つ波のように全てを飲みつくす。
 きっと、それらは全て「いい使い方」をするように作られ
 たのだが、
 片意地な彼女は、それ全てを「誤用」をしているのだ。

詩人は5行目からシーリアの外的な美（特に顔）のパーツ
 パーツを、ペトラルカ的な比喩を用いて賛美する。具体的
 には、髪、眼、唇、などであるが、最後の締めとしては、
 それらのそれぞれの美しいパーツを、シーリアは「誤用」
 していて、自分を男性から遠ざけるために用いている、と
 言う。このソネットに描かれているのは、まさに「ペトラ
 ルカ的狀況」で、相手の美を賛美しつつも、貞節さを重ん
 じるあまり、詩人に対して冷たいと言って責める、いわば
 オキシモロ的な狀況とも言える。この事は相手の女性の
 神格化（悪く言えば、人間性、人間味を排除する事）と大
 きく関わっている。イギリスに根付いた恋愛ソネットは、
 地に足のついた女性を愛する事を指向するがゆえに、現実
 レベルでは自分の欲望と戦って行かねばならないという宿
 命を負っていた。

2) パーシーの列挙法：内的美德と呪詛

さて次に、彼女の（内的）美德を列挙する6番を見る。
 こちらは相手の女性の貞節さとそこから生じる詩人の口説
 きに対する頑なさを責め、同時にそれを受け入れてしおし
 ぶ納得するというものだ。

Sonnet VI.

Good God, how senseless are we paramours,
 So proud on a nothing for to vaunt it?
 We cannot reap the meanest of all favors,

Except by and by we think our suit is granted.
 Had ye observed two planets, which then mounted.
 Two certain signs of indignation.
 Ye would have deemed rather both consented
 To turn all hopes to desperation.
 Then, can you waver so inconstantly,
 To show first love, and then disdainfulness?
 Firs for to bring a dram of courtesy;
 Then, mix it with an ounce of scornfulness?
 No, no, the doubt is answered: certainly,
 She trod by chance, she trod not wittingly.

6

ああ何て事だ。僕ら恋する男は何て馬鹿なんだ。
 自慢するのが目的で、存在しないものを鼻にかける。
 そのくせもっとも低レベルの好意さえ、得る事ができない。
 それどころかやがて自分の願いが受け入れられたと考
 える。
 きみたちがその時登る2つの惑星を観察していたなら
 （それは、2つの「軽蔑」の確かなサインなのだが）
 その2つの惑星が共に、全ての希望を絶望に変える事に
 同意している、と気づいただろうに。
 それでもきみはそんなに気まぐれに心が変わるとい
 うのか。
 まず「愛」を見せておいて次に「軽蔑」を見せるなんて！
 まず僕の前に、ほんのちょっとの「礼儀」を見せてお
 いてその後、たくさんの「蔑視」と混ぜるなんて。
 いやいや、答えはわかった。まちがいない。彼女は
 偶然僕を踏みつけたのであって、わざとではないのだ。

2つの惑星とはシーリアの眼である。そこには「軽蔑」の
 色しかない。最初の詩人側の思い上がり、勘違いはあるも
 のの、結局全ての望みは「絶望」へと変わる。彼女の気ま
 ぐれのゆえに（あるいは詩人の勘違いのゆえに）、詩人は
 時おり「愛」を感じる事もあるが、次にはすぐ「軽蔑」が
 くる。同じ事が「礼儀」(courtesy)と「蔑視」にも言える。
 カプレットには、彼女の気まぐれさを受け入れる事しか
 ないと気づいた詩人がいるが、それは意図的なものではなく、
 無意識 (unwittingly) にやっているんだ、とシーリアを
 多少弁護するような形で終わる。パーシーは、このような
 狀況を、相手の女性の気まぐれと、恋する男側の思い込み、
 思い上がり、勘違い、などに帰しているのが特徴的である。

[5] サー・ジョン・デイヴィース『ガリング・ソネット』・・・「変化」について

サー・ジョン・デイヴィースは1590年代の英国恋愛ソ
 ネット大流行の流れの中では、比較的遅れてきた詩人とし
 て捉えられる事が多い。しかし彼の恋愛ソネット群は、実
 はその執筆年代がはっきりしておらず、おそらくこの考
 え方は代表作『ガリング・ソネット』(Gulling Sonnets, 以
 下GS)が、反ペトラルキズム的内容であるため、文学史
 家たちが彼をより後の時代においたためであると考えられ

る。しかし実は、彼自身もこの時代のソネット流行のまっただ中にいた詩人であり、その影響も大きく受けていた。その1つの証拠として、彼のもう1つの連作ソネット『フィロメルへの10篇のソネット』(Ten Sonnets to Philomel, 1602)は少なくとも反ペトラルカ的形式・内容ではなく、むしろソネット流行の波にのった形での詩群であるという事実がある。ここでは、この矛盾の理由を探るためにソネット文学でよく用いられる〈変化〉のトポスを用いたデイヴィースの作品のいくつかをピックアップして、詳しく見ていきたい。(ここで〈変化〉という言葉が意味するのは、「ある物や人の形態や性質が(特に急に)変わる」ということである。〈転身〉とか〈変身〉という意味も含む。)本論では、この〈変化〉のイメージをメインにすえて、彼の連作ソネット集が彼独自の「新しいソネット」を作り出す試みであったのではないか、という点を論じてみたい。

1) 「病い」, 「感染」——〈変化〉の仮想敵

Sonnet 2

As when the brighte Cerulian firmament
 Hathe not his glory with black cloudes defas'te,
 Soe were my thoughts voyde of all difcontent;
 And with noe myste of passions ouercast;
 They all were pure and cleare, till at the last
 An ydle, carles thoughte forthe wandringe wente,
 And of that poysonous beauty tooke a taste
 Which does the harts of lovers so torment.
 Then as it chauncethe in a flock of sheepe
 When some contagious yll breedes first in one,
 Daylie it spreedes and secretly doth creepe
 Till all the silly troupe be overgone;
 So by close neighbourhood within my brest
 One scurvy thoughte infecteth all the rest.

2

光輝く天の蒼穹が

黒い雲に覆われてその輝きを失う以前と同じように、
 不平不満など何1つなかった僕の想い、
 熱情の霧で覆われてなどいなかった僕の想い、
 それは純粹で晴れやかなものだったのだが、ついには
 無為で、のんきな想いは、さまよい出ていってしまい、
 有毒な美を味わってしまった。
 それは、恋するものの心をひどく苦しめる毒。
 それ以来、あたかも、一団の羊たちの中で、
 ある伝染性の病いが、最初の1匹を冒すと、
 あとは毎日どんどん広がり、密かに感染を広げ、
 ついには無邪気な群れ全体が全滅するように、
 僕の胸の中で非常に近い場所にいたために、
 僕の卑劣な想いが、残りの物全てに伝染してしまったのだ。

このソネットは感染のイメージを使ったソネットだが、この中で目を引くのは「のんきな想い」(6), 「無邪気な群れ」(12)が表現する inamorato 以前の状態と、その後の「有毒な美」(7), 「伝染性の病い」(10), 「卑劣な想い」(14)

などの表現の、際立った対比である。元の状態が純粹であればあるほど、キュービッドの侵入は簡単で、その病いは重くなるという皮肉な状況をうたっている。12行目で使われている silly という語は、愚かな、という意味ではなく、「無邪気で、無防備」というニュアンスである。

一方「有毒な美」とは愛する女性の抗いがたい魅力であり、「卑劣な想い」は自分の肉欲の意であろう。ここにも彼独特のマクロとミクロの身体論があり、器官として、たとえば目から侵入する(目から感染する)と、その恋の病いは体のいろいろな器官を冒し、最後には性的な器官にも影響を与え、そして「欲望」が生じるという図式である。つまり、この詩は「無垢」から「欲望」への変化を劇的に描いていると言える。もちろんここでは、この「病い」は恋の病いであると同時に、ソネット文学全体への言及でもある。言いかえると「ペトラルキズム」は感染性の病いであった。そして、GSのソネット群は「イズム」へのアンチテーゼであり、ペトラルキズムの〈細部〉に対して、経験主義、現実主義の〈全体〉が提示されていると言える。

2) 神の視点——転身物語

次にオヴィディウス的な神の力による〈変化〉をうたっている、GS1番を見てみよう。

Sonnet 1

The Lover under burthen of his Mistress love,
 Which lyke to Aetna did his harte oppresse:
 Did gise such piteous grones that he did move
 The heav'nes at length to pittie his distresse
 But for the fates in their highe Courte above
 Forbad to make the grevous burthen lesse.
 The gracious powers did all conspire to prove
 Yf miracle this mischeife mighte redresse.
 Therefore regarding that the load was such
 As noe man mighte with one mans mighte sustayne,
 And that mylde patience imported much
 To him that shold indure an endles payne,
 By their decree he foone transformed was:
 Into a patiente burden-bearinge Asse.

1

恋する男は、恋人への愛の重みによって、
 (それはエトナ山のように彼の心を圧迫したが)
 非常に哀れなうめき声をあげたので、ついには天を動かし、
 彼の悲惨さを憐れむよう仕向けた。
 しかし、天上の高等裁判所所属である運命の女神たちが、
 その重荷を軽減する事を拒んだので、
 慈悲深い神々は謀議して、
 〈奇跡〉がこの苦しみを取り除けるのではと考えた。
 そして神々は、その重荷が
 1人の人間が1人の力で背負うにはあまりにも重いすぎると考えて、
 また、中途半端な忍耐力では、
 絶え間ない苦痛に耐えるには不十分だと考えて、

彼らの命令により、彼はすぐに姿を変えられた。
我慢よく荷物を運ぶ、ロバの姿へと。

このソネットの構造は、計算された単純さを持っている。最初に恋する男を登場させ、その苦しみの重荷があまりにも彼を圧迫するので、神々は彼を憐れんだが、運命の女神たちはその軽減を許さない。それで神々が相談して、彼を苦しみのない姿（ロバ）に変える、という内容である。運命の女神たちは神よりも上位の存在であるという考え方を利用し、彼自身法学院出身であったという利点を生かした、法廷のイメージを導入してうまくロジックを展開している。最後に変えられる姿がロバ（ass）であるというのは「恋するもの（特に恋のソネットを書くもの）は、みんな愚か者だ」という皮肉であろうが、深刻さや悲劇性は感じられず、非常にコミカルな、パロディのような詩になっている。変化の過程を詳細に述べる一方で、(1) その影響や、その変化へのコメント、教訓などは一切あげない点、(2) 韻（ababababcdcdee）に徹底的にこだわるという点で、典型的なデイヴィースのソネットだと言える。

3) <変化>しつづける詩人

次に見るのは、詩人自体が<変化>するパターンである。
(GS3)

Sonnet 3

What Eagle can behold her sunbrighte eye,
Her sunbrighte eye that lights the world with love,
The world of Love wherein I live and dye,
I live and dye and divers chaunges prove;
I chaunges prove, yet still the fame am I,
The same am I and never will remove,
Never remove untill my soule dothe flye,
My soule dothe fly and I surceafe to move,
I cease to move which now am mov'd by yow,
Am mov'd by yow that move all mortall hartes,
All mortall hartes whose eyes your eyes doth veiw,
Your eyes doth veiw whence Cupid shoots his darts,
Whence Cupid shootes his dartes and woundeth those
That honor you, and never weare his foes.

3

どんな驚なら彼女の目の太陽の輝きを見つめられる？
太陽のように輝く目、それは愛で世界を照らす。
愛の世界、その中で僕は生き、死ぬ。
僕は、生き、死に、さまざまな変化を体験する。
僕は変化を体験する。しかしそれでも僕は変わらない。
僕は変わらない、そして決して消えない。
決して消えない、僕の魂が飛び去るまでは。
僕の魂は飛び去れば、僕は動く事をやめる。
動く事をやめる僕は、今はきみによって動かされている。
僕を動かしているきみは、すべての人間の心を動かす。
すべての人間の心、その目はきみの目を見ていて、
きみの目は見るが、そこからキューピッドは矢を放つ。

そこからキューピッドは矢を放ち、傷つけるのだ。
きみを崇め、一度も敵になったことなどない人間たちを。

この詩は、前の行の最後のフレーズで次の行ではじめるという非常にユニークな形式（gradatio）を取っている。この詩の大前提はペトラルカ的なソネットの形式に対する揶揄である。しかし同時にこのソネットが含み込んでいる<変化>、<変身>というものも注目に値するのではないか。それは4行目あたりから始まる。特筆すべきことは今あげた数行では、その内容がこのソネットの主旨である「口説き」とは離れて、メタフィジカルな瞑想に陥っているという点である。自分は変化を体験しつつ、しかし変わらない。魂が持って行かれるまでは。（すなわち死ぬまでは。）詩人は、自分を、自らは回転しながらもそれ自体は不動である惑星のような存在として描いている。ここには、他のソネット詩人たちの影響を受けない詩人としての自負が感じられる。このソネットは、「彼自身は様々な種類の詩を書く（変化する）が、彼自身の詩の理想は決して不動である」とも読めるのである。しかし次の9行目から、再び彼はペトラルカ的な詩人にもどり、自分の想いをうたう。

以上、デイヴィースの3つの<変化>を中心にGSを見てきたが、この<変化>はソネット文学に欠かす事のできない「欲望」の処理、昇華と深く結びついていた。そう考えると、デイヴィースのGSは反ペトラルカどころか、ペトラルカの方を向いていると言えるのではないか。

[6] リチャード・バーンフィールド『シンシア』 (1595)・・・同性愛的ペトラルキズム

リチャード・バーンフィールド（1574-1627, 1620?）と言え、シェイクスピアが関与したミセラニー *The Passionate Pilgrim* (1599) に詩を提供した詩人として、また同性愛的の詩人として知られている。彼はどちらかという、若い時に活躍した詩人で、25歳前に3冊の詩集を出している。彼に対する評価は総じて高いが、彼の同性愛的傾向（とその宣言）に読者の関心が向かってしまい、詩自体についてはあまり論じられない傾向が続き、今もそういう傾向がある。本論の一番の関心事は「ペトラルカ的な言説が男性の相手に対して使われた場合、その表現に差異が生じるのかどうか、またその効果はどうか」という点である。

バーンフィールドは全部で4冊の詩集（5冊という説もあり）を上梓しているが、本論ではソネット詩人としての彼に焦点を当てるという事で、彼の連作ソネット集『シンシア（サーティン・ソネットつき）』（*Cynthia. with Certain Sonnets*, 1595）を中心に、その特質、特にペトラルキズム、を探っていきたいと思う。この詩集の構成について述べると、まず物語詩「シンシア」が置かれ、その後今回扱う20個の連作ソネットが来て、それに「オード」、「カッサンドラ」が続く。なお詩集中、連作ソネットの部分では、詩人は自分をダフニスと称し、歌われる対象の男性はガニミードと呼ばれている。

1) ガニミードの来歴 (9番と10番)

ガニミードの来歴をうたったソネットが、以下の2つである。

SONNET. IX.

Diana (on a time) walking the wood,
To sport herselfe, of her faire traine forlorne,
Chaunc't for to pricke her foote against a thorne,
And from thence issu'd out a streame of blood.
No sooner shee was vanisht out of sight,
But loues faire Queen came there away by châce,
And hauing of this hap a glym'ring glance,
She put the blood into a christall bright.
When being now comne vnto mount Rhodope,
With her faire hands she formes a shape of Snow,
And blends it with this blood; from whence doth grow
A louely creature, brighter then the Dey.
And being christned in faire Paphos shrine,
She call'd him Ganymede: as all diuine.

9

ある時、ダイアナが森を歩いていて、
ふざけて、自分の美しいお付きの女たちをまいた。
するとたまたま彼女の足に棘がささり、
そこから、血の海が流れ出た。
彼女が見えなくなるやいなや、
美しい愛の女神が、たまたまそこを通りかかり、
この出来事をちらっと見てとると、
彼女は、その血を、輝く鏡に注いだ。
その後、すぐさまロドピー山にたどり着き、
麗しい手でもって、雪の塊を作った。
そしてそれに、例の血をまぜた。そこから
1人の美しい人間が生まれた。太陽よりも美しい。
そして、麗しのパフォスの神殿で命名され、
彼女は彼をガニミードと呼んだ。完全に聖なる者として。

SONNET. X.

Thus was my loue, thus was my Ganymed,
(Heuens ioy, worlds wonder, natures fairest work,
In whose aspect Hope and Dispaire doe lurke)
Made of pure blood in whitest snow yshed,
And for sweete Venus only form'd his face,
And his each member delicately framed,
And last of all faire Ganymede him named,
His limbs (as their Creatrix) her imbrace.
But as for his pure, spotles, vertuous minde,
Because it sprung of chaste Dianaes blood
(Goddesse of Maides, directresse of all good.)
Hit wholly is to chastity inclinde.

And thus it is: as far as I can proue,
He loues to be belou'd, but not to loue,
10

僕の愛する人、僕のガニミードはこうだ。

(天の喜び、世界の驚異、自然の最も美しい作品。

その面差しには希望と絶望が隠れている。)

彼は真っ白な雪に落とされた純潔な血から作られたのだ。
そしてまさに美しいヴィーナスに因んで彼の顔が作られた。

その繊細につくられた体、最終的に

全ての美しいものの中からガニミードと名づけられた。

彼の四肢は(その作り主として)彼女をかき抱いた。

しかし、彼の純粋で、汚れなく、徳高い心は、

貞節なダイアナの血から生まれたという事情で、

(ダイアナ、彼女は乙女たちの女神、全ての善を導くもの。)

彼は、必ず貞節さへと向かうのだ。

結果こうなった。僕が知る限りにおいて、

彼は愛されるのが好きで、愛する事ではない。

9番の方はいかにしてガニミードが生まれたかという詩である。ヴィーナスが、ダイアナの血を雪と混ぜて、できたのがガニミードというストーリーである。つまり、ガニミードはダイアナの貞節さ(純潔さ)とヴィーナスの美しさ(妖艶さ)を合わせもつ存在としてこの世に生を受けた、美少年という事になる。

10番も、それを少し違う視点から述べたもので、上にあげた2つの性格は、ガニミードの中で混ざり合い、「しかし、彼の、純粋で、汚れなく、徳高い心は、それが貞節なダイアナの血から生まれたという事情で、・・・彼は、必ず貞節さへと向かう」のである。そして、その結果「彼は愛されるのが好きで、愛する事ではない。」このような上から目線の、威厳ある態度は、自分の美しさと能力に自信を持っており、卑しいものや小さなものには近づかない、頑なさを持っているからである。

バーンフィールドは、この2つのソネットでガニミードのイメージを具体的につくりあげ、その彼を言葉の誘惑によって口説いていこうとする。

2) 同性への愛

次に、同性へのプラトニックな愛情表現を含んでいると思われるソネットとして、『シンシア』16番を取り上げてみる。実はこのソネットは、複数の批評家も同じようなコンテキストで取り上げているが、ここではペトラルカ的な視点を付け加えて読んでみたいと思う。

SONNET. XVI

Long haue I long'd to see my Loue againe,
Still haue I wisht, but neuer could obtaine it;
Rather than all the world (if I might gaine it)
Would I desire my loues sweete precious gaine.
Yet in my soule I see him euerie day,
See him, and see his still sterne countenance.
But (ah) what is of long continuance,
Where Maiestie and Beautie beares the sway?
Sometimes, when I imagine that I see him,
(As loue is full of foolish fantasies)

VVeening to kisse his lips, as my loues fee's, I feele but
Aire: nothing but Aire to bee him.
Thus with Ixion, kisse I cloudes in vaine:
Thus with Ixion, feele I endles paine.

16

とても長い事、僕は愛する人にもう一度会いたいと熱望してきたし、
今でもずっと望んでいる。だがその望みが叶った事はない。
世界全部と交換でも（もし得られれば、の話だが）
美しく、貴重な、愛する人を得る事の方を望む。
とはいえ、僕は、心の中で毎日彼に会っている。
彼に会い、彼のいつもの厳しい顔を見る。
だが、ああ、一体何が長続きするだろう。
威厳に満ちた美が、力を奮っているのだから。
時として、僕が彼に会う事を想像する時、
（愛する者は、愚かな幻想に満ちているのだ！）
僕の愛する想いの代償として、彼の唇にキスできる事を期待するが、
空気しか感じない。彼が空気に過ぎないと知る。
このようにイクシオンと同じく僕は虚しく雲にキスし、
このようにイクシオンと同じく終わらない苦痛を感じる。

詩人は、ソネット冒頭で、愛する人に会えない事を嘆いていて、もし会えるなら「全世界と交換でもいい」とまで言う。しかし、詩人は愛する人には会えない。それで、彼は想像の世界に逃げ込む事になる。「僕は、心の中で、毎日彼に会っている。」「威厳に満ちた美」である彼。詩人の想像はエスカレートし、愛する人とキスする事を想像しはじめる。が、想像力の限界か、あるいは他の理由で、詩人は「愛する人」が空気でしかないと実感させられ、同じ経験をした神話上の人物イクシオンと共に改めて、愛する人の不在を嘆く。最後のカプレットには、イクシオンの2つの顔が凝縮されている。13行目のイクシオンはヘラを寝取ろうとした時ジョウブに露見してしまい、ヘラの形をした雲と交わらされる、というエピソードにもとづいている。

また、14行目のイクシオンはその罰として車輪に結びつけられ永遠に拷問を受けるイクシオンの姿である。当時の文献（特にソネット）では、14行目の方の車輪に結ばれ罰を受けるイクシオンの方がポピュラーで、13行目の「雲を抱くイクシオン」は少ないという事実は注目に値する。うがった見方をすると、詩人は雲のイメージで、男性同士の愛の虚しさ、不毛さを表現しようとしたのではなかったか。もちろん、その虚しさは決して否定的な意味合いのみを持つものではなく、肉欲の衝動に囚われないより高次の愛の表現という事になるのである。

使用テキスト

- [1] トマス・ロッジ (Thomas LODGE, 1558-1625) 『フィリス』 (*Phyllis : Honoured with Pastorall Sonnets, Elegies, and amorous delights*, 1593) *The Complete Works of Thomas Lodge*. Vol. II. (1963) Russell & Russell, New York.
- [2] ジャイルズ・フレッチャー (Giles FLETCHER, 1546-1611) 『リシア』 (*Licia*, 1593) BERRY, L.E. ed. (1964) *English works of Giles Fletcher the Elder*. University of Wisconsin Press, Madison.
- [3] 匿名詩集『ゼフィーリア』 (*Zepheria*, 1594) Christian, Margaret. ed. (Spring, 2003) "Zepheria" (1594 ; STC 26124) : A Critical Edition." *Studies in Philology*, Vol.100, No.2, pp.177-243.
- [4] ウィリアム・パーシー (William PERCY, 1575-1648) 『シーリア』 (*Sonnets to the Fairest Coelia*, 1594) Alexander B. GROSSART. ed. (1877) *Occasional issues of unique or very rare books*. Vol. IV. Privately printed for subscribers only, Manchester.
- [5] サー・ジョン・デイヴィース (Sir John DAVIES, 1569-1626) 『ガリング・ソネッツ』 (*Gulling Sonnets*, ca.1595) Krueger, Robert. ed. (1975) *The poems of Sir John Davies*. Clarendon Press, Oxford.
- [6] リチャード・バーンフィールド (Richard BARNFIELD, 1574-1627) 『シンシア』 (*Cynthia*, 1595) Klawitter, George. ed. (1990) *Richard Barnfield : The complete poems*. Susquehanna UP, Selinsgrove.
(和訳はすべて拙訳)

Lesser Sonneteer Contributions: Examples from Elizabethan Minor Love Sonnet Sequences

By

Hiroto IWANAGA*†

(Received December 1, 2022/Accepted December 2, 2022)

Summary : During my academic career in Nodai, almost all my research energy was applied to the study of Elizabethan love sonnet sequences, whose peak was at the end of the sixteenth century England. The sonnet form itself is said to be born in 13th Century Sicily, but it got extraordinarily popular as a main poetical form with the participation of *dolce stil nuovo* poets, especially Dante Alighieri. But the main source of 16th English sonneteers, the topic of this article, is the works of Petrarch (1304-1374). Later, his manners and dictions of writing sonnets was called “petrarchism”.

Here in this paper, I planned to compile the essays I have been written during my 35 years in Nodai. But since half of them were published in 2010 as a book *Petorarukizumu no Arika (Where is petrarchism in Elizabethan Sonnets?)*, here I put only six papers not in the book. The poets discussed here are : Thomas LODGE (1558-1625), Giles FLETCHER (1546-1611), the poet of *Zepheria* (anonymous), William PERCY (1575-1648), Sir John DAVIES (1569-1626), Richard BARNFIELD (1574-1627).

Key words : Elizabethan sonnets, love sonnets, minor sonneteers, platonism, Petrarch, petrarchism, English sonnets, Shakespeare

* Professor Emeritus, Tokyo University of Agriculture

† Corresponding author (E-mail : iwan@nodai.ac.jp)